

1498年明応東海地震と明応関東地震

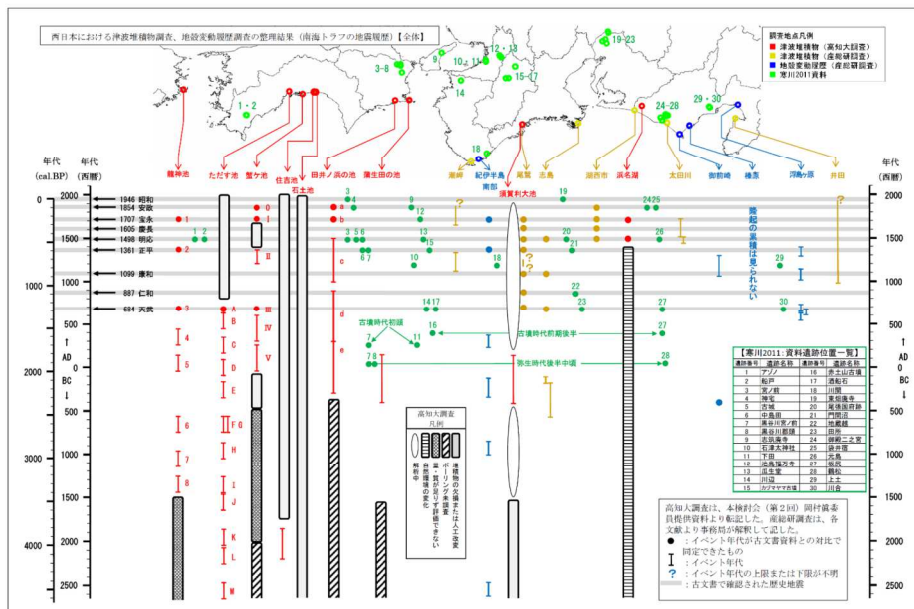
名古屋大学減災連携研究センター エネルギー防災(中部電力)寄付研究部門
浦谷 裕明

東北地方太平洋沖地震と869年貞観地震の関係

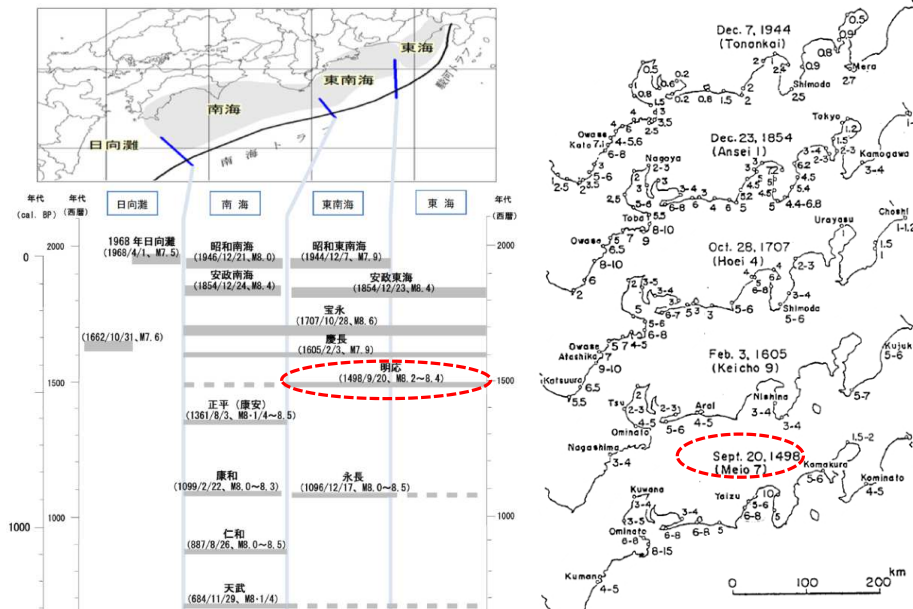
津波堆積物による貞観地震の推定浸水域と東北地方太平洋沖地震の浸水域



過去の南海トラフ沿いの巨大地震・津波



明応地震・津波(明応七(1498)年八月二十五日)



明応地震・津波(明応七(1498)年八月二十五日)

明応津波によって・・・

- ・鎌倉の大仏殿(標高14m程度)が流失？
- ・浜名湖口が切れ外海と繋がった？
- ・日本三津の一つである安濃津が壊滅・荒廃？

(東北地方太平洋沖地震後には・・・)

- ・伊豆西岸(戸田)で、地元伝承から津波高30m超？

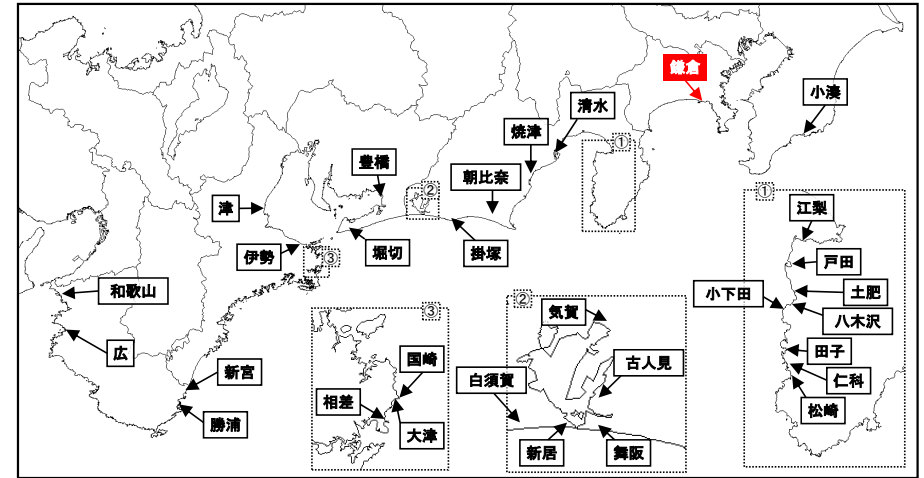
↑ 宝永、安政東海、昭和東南海では、このような劇的な出来事は知られない。



明応津波は他の南海トラフ地震津波に比べてりわけ大きな津波であった？

これまでの調査地点

- これまで、愛知・静岡・三重の東海地方を中心に、主に明応地震津波に関する調査(文献調査、聞き取り、現地確認など)を実施。
- さらに明応地震津波の震源・波源像について検討するため、東端や西端の神奈川・千葉・和歌山についても調査を実施。



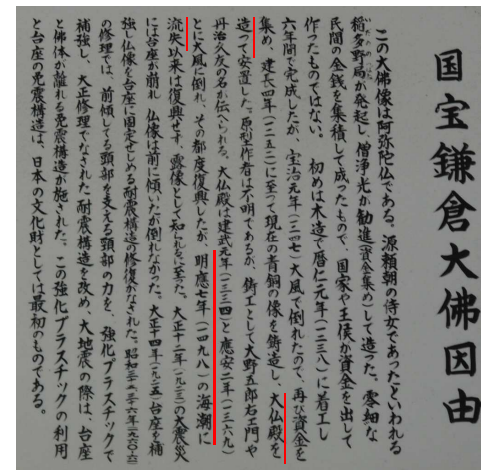
鎌倉の大仏殿が流失？

◆高徳院・鎌倉大仏



鎌倉の大仏殿が流失？

◆高徳院・鎌倉大仏



この大仏は阿彌陀仏である。・・・(略)・・・初めは木造で・・・(略)・・・建長四年(1252)に至つて現在の青銅の像を鑄造し、大仏殿を造つて安置した。・・・(略)・・・大仏殿は建武元年(1334)と應安二年(1369)ともに大風に倒れ、その都度復興したが、明応七年(1498)の海潮に流失以来は復興せず、露像として知られるに至つた。・・・略・・・

明応地震の震源・波源像

○明応年間の関東地方(鎌倉など)における地震津波被害については、これまで、「明応東海」による被害とされるとともに、推定された津波被害の規模から、下記のような震源・波源像が示されている。

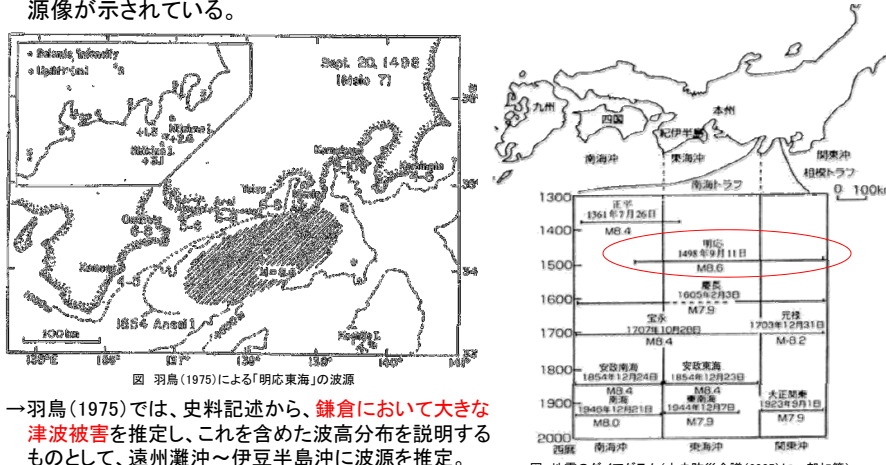


図 羽鳥(1975)による「明応東海」の波源

図 地震のダイアグラム(中央防災会議(2005)に一部加筆)

→羽鳥(1975)では、史料記述から、**鎌倉において大きな津波被害を推定し、これを含めた波高分布を説明するものとして、遠州灘沖～伊豆半島沖に波源を推定。**

→中央防災会議(2005)では、南海沖～関東沖における地震のダイアグラムにおいて、「明応東海」については、南海沖の一部から関東沖に震源域を推定。

→中田・他(2013)では、明応地震の震源として、南海トラフ東部南方の銭洲断層系を推定。

9

明応年間の鎌倉における被害記述

◆被害記述

『鎌倉大日記』

明応四乙卯八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢入大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余

⇒信ぴょう性:低?

『塔寺八幡宮続長帳(異本塔寺長帳)』

明応七年八月二十五日、大地震、一日一夜三十度震、鎌倉由井浜海水涌、大仏殿迄上ル

(参考)

・南海トラフを震源とする明応地震は、明応七(1498)年八月二十五日に発生。

10

『鎌倉大日記』について

【被害記事】: 明応四乙卯八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢入大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余

- ・年表形式で、治承四(1180)年から天文八(1539)年の、主に東国の出来事を記している。
- ・生田本、彰考館本の2系統があるとされる。
 - ・生田本は、治承四(1180)年から永享十一(1439)年まで記録。
 - 明応(1492-)の記録無。
 - 応永二十年代頃(1413-1422)に既存の年代記を基に書写し、永享十一(1439)年頃まで追筆したとされる。
 - ・彰考館本は、治承四(1180)年から天文八(1539)年まで記録
 - 明応(1492-)の記録有。
 - 彰考館本における治承四年～永享十一年の記述は生田本が原型であろうとされる。
- ・彰考館本は、生田本にはない永享十一年から明応五年頃までの記載事項が非常に多いが、そこには誤りも多いことが指摘され、その信憑性について議論される。
- ・片桐(2014)は、彰考館本の原本について史学的に検討し、**明応期を含む応仁～文亀元年(1467～1501)の記述については、文亀元(1501)年から間もない時期に、鎌倉あるいはその近辺に居住した者によって記された可能性が高く、明応四年の鎌倉における被害記述については、信頼できる、としている。**

(参考)

・明応四年八月十五日については、『御湯殿の上の日記』に「(同年八月)十五日(中略)地しんゆる」、『後法興院記』に「十五日乙丑晴 酉剋地震」とある(どちらも第一級史料)。

11

『鎌倉大日記』について

◆片桐(2014)による鎌倉大日記(彰考館本)についての論考

明応頃(1492-)の記事の執筆時期について

- ・応仁元(1467)年の記事、「八月廿三日、一院・上皇・今上行幸室町殿、因兵乱也。」
 - 「一院・上皇・今上」は、誰に当たるか。
 - ・「一院」は、「(文明二(1470)年)(十二月)二十一日、一院於室町殿崩御」とあり、**御花園天皇**(在位:正長元(1428)～寛正五(1464)年。文明二(1470)年、崩御。)
 - ・「上皇(先代の天皇)」は、御花園天皇の次代・**後土御門天皇**(在位:寛正五(1464)年～明応九(1500)年。在位のまま崩御。)
 - ・「今上(現在在位の天皇)」は、後土御門天皇の次代・**後柏原天皇**(在位:明応九(1500)年～大永六(1526)年。)。なお、後柏原天皇は、応仁元(1467)年(上記記事)当時4歳。
 - 応仁元(1467)年の上記記述は、1500～1526年に書かれたものであることが明らか。**
- ・彰考館本の年代記は、後柏原天皇即位の翌年である文亀元(1501)年で途切れている。

⇒明応頃(1492-)の記事は、後柏原天皇の在位期間に加筆、なかでも、年代記の記事が途切れる**文亀元(1501)年から間もない頃**であった可能性が高い。

明応頃(1492-)の記事の執筆者について

- ・執筆者にとって身近な出来事(風水害や寺社の出来事など)は、政治的な出来事とは無関係に記録される。
- ・応仁～文亀頃の当該記事は、いずれも鎌倉における寺社や地名。
- ⇒執筆者にとって、**身近な鎌倉かその近辺**において見聞きしたことを記したと推定。

明応年間の鎌倉における被害像

『鎌倉大日記』

明応四乙卯八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢入大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余

- ◆『水勢入大仏殿破堂舎屋』について
- ・『梅花無尽蔵(中世僧・万里集九の紀行文)』文明十八(1486)年十月二十四日の記述。
逢銅大仏、々長七八丈、膺中空洞、応谷数百人。(中略)兪云、此中往々博奕者白昼呼五白之処也、無堂宇、而露坐突兀
→文明十八(1486)年には大仏を覆う建物としての「大仏殿」は存在していない。
- ・日蓮(1222~1282)や禅僧義堂周信(1325~1388)は、大仏のある寺院そのものを「大仏殿」や「大仏寺」と称していた。
→『日蓮書状』の中には、書状の宛て先として、「大仏殿」、「大仏殿長老」、「大仏殿別当御房」としたものがある。

⇒「大仏殿」と称される寺院の境内にある堂舎屋が破壊。

- (参考)
- ・禅僧・義堂周信が、「大仏寺」に宿した時に寺の様子をの詩。
宿相之大仏寺(中略) 寺瀨ア海岸吹テ、松ヲ激シ。潮退テ灘沙送レコト、月ヲ長シ
→「寺瀨海岸」など、比較的海岸近くまで境内が広がっていた可能性。

明応年間の鎌倉における被害像

『鎌倉大日記』

明応四乙卯八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢入大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余

- ◆『海水到千度檀』について
- ・『千度檀』とは、鶴岡八幡宮参詣路・段葛のこと。
→『梅花無尽蔵(中世僧・万里集九の紀行文)』文明十八(1486)年の記事に「透千度小路、謁鶴岡之八幡宮(中略)千度檀連七里浜」とある。
→現在の段葛は、明治初年に一部撤去され短くなったものであり、以前は「浜の大鳥居」まで続いていた(石碑「段葛」碑文より)。
⇒段葛に達するような津波。



明応年間の鎌倉における被害像

『鎌倉大日記』

明応四乙卯八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢入大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余

- ・明応四(1495)年八月十五日に、鎌倉を津波が襲った。
- ・津波は、段葛に達し、「大仏殿」と称する寺院の堂舎屋を破壊。

◆明応地震津波(南海トラフ地震)とは別要因?



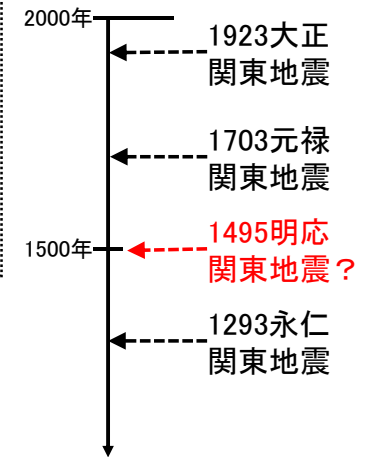
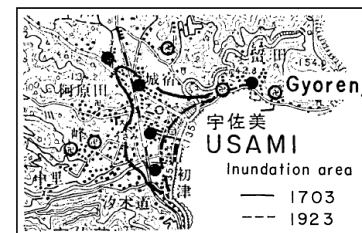
- ・1703年元禄関東地震津波では、鎌倉において、海水が「二の鳥居まで上がった」、「材木座・光明寺に入る」とされる。
- ◆明応四年八月十五日の相模トラフ地震の可能性。



明応年間における相模湾の津波記録と関東地震

◆明応四(1495)年関東地震について

- 金子(2012)
- ・伊東市宇佐美遺跡における発掘調査で見られたイベント堆積物について、遺物などから15世紀末の津波によるもの。
- ・この15世紀末の津波堆積物の広がりおよび標高として、津波は、8m程度の浜提を乗り越え、背後の低地に広がった。
- ・この要因として、明応四(1495)年に相模トラフを震源とする関東地震の発生を示唆。
- ・元禄関東では、宇佐美のほとんど全域が浸水した模様、10m前後の高さに達した。(羽鳥1975)



◆明応四年八月十五日の相模トラフ地震の可能性。

明応年間の鎌倉における被害記述

◆被害記述

『鎌倉大日記』

明応四乙卯八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢入大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余

- ・高い信ぴょう性！
- ・明応四(1495)年八月十五日に、**段葛に達し**、「大仏殿」と称する寺院の**堂舎屋を破壊**するような津波被害！**関東地震津波か？**

『塔寺八幡宮統長帳(異本塔寺長帳)』

明応七年八月二十五日、大地震、一日一夜三十度震、鎌倉由井浜海水涌、大仏殿迄上ル

(参考)

- ・南海トラフを震源とする明応地震は、明応七(1498)年八月二十五日に発生。

17

『塔寺八幡宮統長帳』について

◆塔寺八幡宮統長帳(異本塔寺長帳)

- 塔寺八幡宮(心清水八幡神社)
- ・所在地:福島県河沼郡会津坂下町塔寺
- ・社伝によれば源頼義が天喜三(1055)年にこの地に八幡神社を勧請したことがはじまり
- ・『塔寺八幡宮長帳』(重要文化財)を保存。



★『塔寺八幡宮長帳』

- 被害記述:明応七年八月二十五日、巳刻ニ大地震アリ、此年鼠乱候
- 成立などについて
- ・心清水八幡宮の年記(貞和六(1350)年から寛永十二(1635)年までの286年間を記録)。
- ・裏書に、会津を中心とした社会の動きや災害など、その年々の出来事が記録。
- ・上記記述についても、明応当時に書かれたもので、その信憑性は高いとされている。
- ・記述内容としては、**地震の発生を記しているのみで、被害地については記述していない。**

『塔寺八幡宮統長帳(異本塔寺長帳)』

- 被害記述:明応七年八月二十五日、大地震、一日一夜三十度震、鎌倉由井浜海水涌、大仏殿迄上ル
- 成立などについて
- ・宝暦年間(1751~64)以後に成立。筆跡から複数人による編纂。
- ・古い時代のことは『塔寺八幡宮長帳』をもとに、その他の史料も参照。

18

明応年間の鎌倉における被害記述

◆被害記述

『鎌倉大日記』

明応四乙卯八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢入大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余

- ・高い信ぴょう性！
- ・明応四(1495)年八月十五日に、**段葛に達し**、「大仏殿」と称する寺院の**堂舎屋を破壊**するような津波被害！**関東地震津波か？**

『塔寺八幡宮統長帳(異本塔寺長帳)』

明応七年八月二十五日、大地震、一日一夜三十度震、鎌倉由井浜海水涌、大仏殿迄上ル

- ・明応七(1498)年八月二十五日に、鎌倉を津波が襲った**明確な根拠はない！**

(参考)

- ・南海トラフを震源とする明応地震は、明応七(1498)年八月二十五日に発生。

19

まとめ

- ・明応年間における鎌倉の被害は、**明応四(1495)年八月十五日**であった可能性。
→明応地震(**明応七(1498)年八月二十五日**)とは異なる。
 - ・明応年間に鎌倉を襲った津波の様相は、**段葛に達する**ような津波。
→大仏殿を流失させるようなものではない。
→関東地震による津波の様相に類似。
- ⇒明応年間に、相模トラフを震源とする関東地震(**明応関東地震**)の可能性。

20